

した。住民の希望と調査団の希望は必ずしも一致するわけではなく、むしろ対立することのほうが多かった。しかし、議論はそこから始まったのである。そして、そのときに森林の現状とその問題点を住民とともに探ることができたのだと思っている。大切なのは住民自身に問題を意識させることであり、そのためには徹底した対話が必要なのである。

図書紹介

◎アフリカのアグロフォレストリー (Paul Kerkhof, 1990, Agroforestry in Africa — A Survey of Project Experience—, Panos Publications, London. pp.216 約 3,200 円)

この本はタイトルにアグロフォレストリーとあるものの、ここでのアグロフォレストリーは、どちらかと言えば社会林業的なことを意味している。従って本書の中でレビューされている林業プロジェクトの中には、技術的な面から見ると、アグロフォレストリーとは呼べそうもないものまで含まれている。

本書の中にはアフリカ各地で各国の援助団体、国際機関、NGO等が実施した住民向けの林業プロジェクトの経過と結果が概観され、評価がなされている。紹介されているプロジェクトは11ヶ国、19プロジェクトにのぼり、地域的にもケニアをはじめとする東アフリカから、ジンバブエなどの南部アフリカ、そしてセネガルなどの西アフリカまで網羅されている。

おおむねこのプロジェクトでも、最初に技術に走りすぎ、あるいは地域住民の参加が不十分で行き詰まり、大胆に発想の転換をして甦る、といったパターンを見せている。中には木を増やすために必要な技術は林業ではなかった、といった話もあり、フォレスターにはいささか耳が痛いのが、自らのプロジェクト経験を照らし合わせてレビューする場合の良いポイントを示してくれている。

本書で一番重要なのは、普通はあまり表に出てこない失敗を記録し、その原因を分析し、そしてどのような解決策を取ったかという経過を記録していることである。私自身かつてアフリカの林業プロジェクトに身を置いていて、もっと早く本書を利用していたら、問題に気づくのも早かったであろう、と思う点が多々ある。アフリカだけに限らず、社会林業関係の方にはぜひ参考にしていただきたい書である。

ただし、1990年に出版された書であり、当時は社会林業がそれまでの技術先行から、社会への配慮を重視する形へと変わりつつある段階であったと言える。したがって現在一般的になっている住民参加型アプローチという観点から読めば、本書での分析を若干甘く感じることは否めない。

(野田直人)